

大洲城跡 (石垣C箇所)

調査名) 城山公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査

調査期間) 平成 26 年1月～平成 26 年2月

調査箇所) 大洲城跡 本丸井戸曲輪(石垣C箇所)

調査面積) 約 80 m²

調査に至る経緯)

平成 23 年度に作成した『大洲城跡石垣保存修理計画書』をもとに、今回、石垣の破損が大きく早期の修理が必要な本丸井戸曲輪の北西隅の石垣を「石垣C箇所」として、石垣解体前の事前の発掘調査を行いました。調査は解体する石垣の上面部分を対象として、江戸時代の遺構確認、石垣修理に向けての基礎データ収集を目的に実施しました。

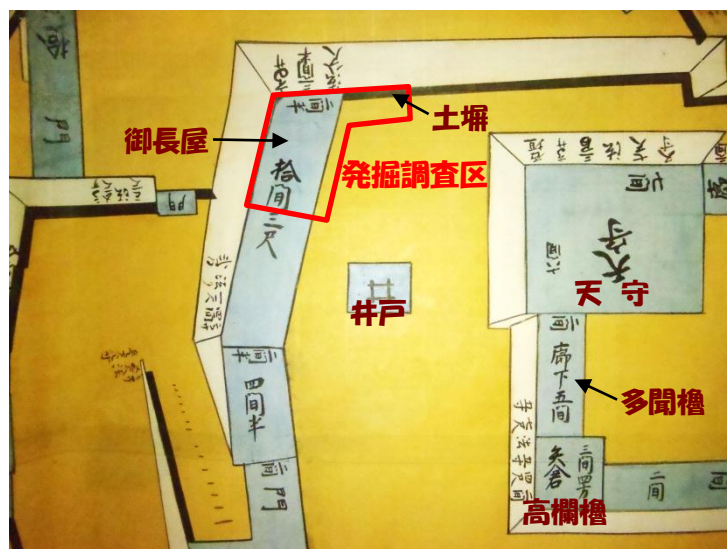
調査の概要)

調査対象の範囲内には、江戸時代の絵図に「御長屋」と「土塀」が描かれていることから、調査はこれらの遺構の検出を想定してL字形に調査区を設定して実施しました。

調査の結果、調査区全域で当時の地表面が明治時代以降に大きく削られていることが分かってきました。本来の地表面は、石垣の天端石(最上端の石)と同じ高さだったと考えられることから、全体的に 20～40 cmほどは削られたものと考えられます。さらに、攪乱坑(明治期以降に掘られた穴)なども多く掘削されており、その結果、御長屋や土塀に関する遺構のほとんどが破壊されていることが確認されました。

今回の調査成果のポイント!

- ① 幅広の石垣裏込の発見
- ② 石垣に影響を及ぼす根の検出



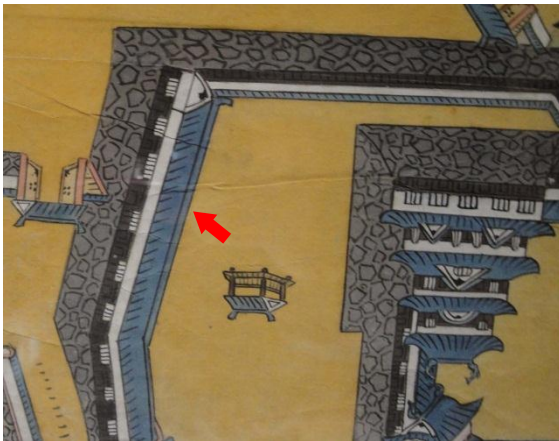
『御城中御屋形并地割図』(江戸前期)
(加藤家蔵)

★「御長屋」について

多聞櫓や渡櫓にあたる防御施設で、有事の際には守りの施設として、平時の際には倉庫として利用されました。絵図に描かれた御長屋は、幅二間半(約 4.9m)と大洲城内ではやや大型のもので、城外側には幅一間(約2m)ほどの武者走^{むしやばしり}を設けて防備に当て、城内側の残りの部分は小部屋に仕切って武器や食料などの軍需物資の倉庫としたものと考えられます。



『御城中御屋形并地割図』元禄5(1692)年
(加藤家蔵)



『大洲城絵図』元禄5(1692)年
(大洲市立博物館蔵)



『伊予大洲城図』寛延2(1749)年
(加藤家蔵)

★調査により発見された遺構

○御長屋の礎石下の根固め

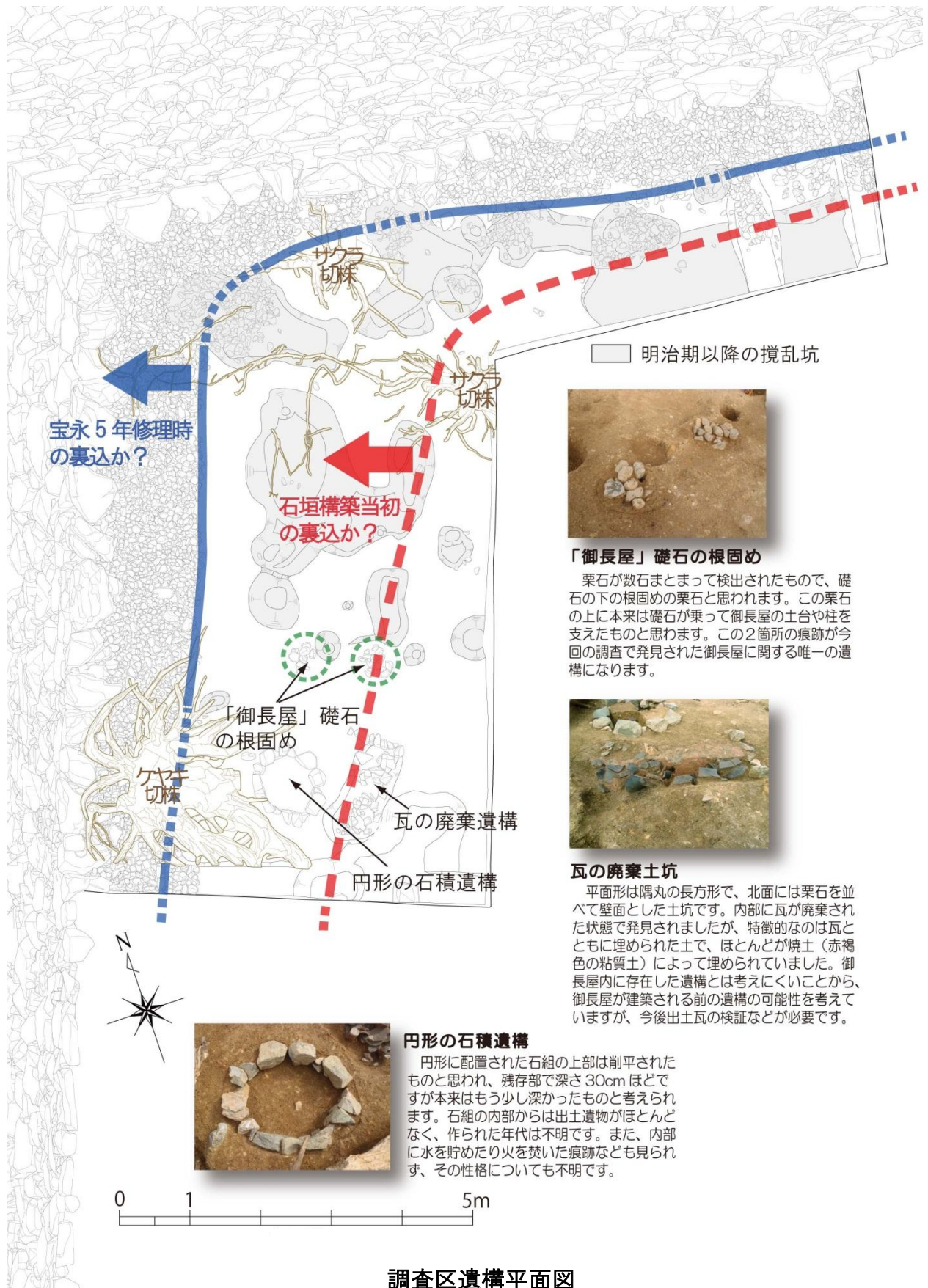
今回の調査で発見された御長屋に関する唯一の遺構。礎石を固定するために下に敷かれた栗石。

○円形の石積遺構

石積内部に水を貯めたり火を焚いた痕跡などは見られず、性格不明の遺構。出土遺物もほとんどなく年代も不明。

○瓦の廃棄土坑

瓦とともに埋められた土のほとんどが焼土(赤褐色の粘質土)。御長屋内に存在した遺構とは考えにくく、御長屋建築前の遺構の可能性はある。



「御長屋」礎石の根固め

栗石が数石まとまって検出されたもので、礎石の下の根固めの栗石と思われます。この栗石の上に本来は礎石が乗って御長屋の土台や柱を支えたものと思われます。この2箇所の痕跡が今回の調査で発見された御長屋に関する唯一の遺構になります。



瓦の廃棄土坑

平面形は隅丸の長方形で、北面には栗石を並べて壁面とした土坑です。内部に瓦が廃棄された状態で発見されましたが、特徴的なのは瓦とともに埋められた土で、ほとんどが焼土（赤褐色の粘質土）によって埋められていました。御長屋内に存在した遺構とは考えにくいことから、御長屋が建築される前の遺構の可能性を考えていますが、今後出土瓦の検証などが必要です。



円形の石積遺構

円形に配置された石組の上部は削平されたものと思われ、残存部で深さ30cmほどですが本来はもう少し深かったものと考えられます。石組の内部からは出土遺物がほとんどなく、作られた年代は不明です。また、内部に水を貯めたり火を焚いた痕跡なども見られず、その性格についても不明です。

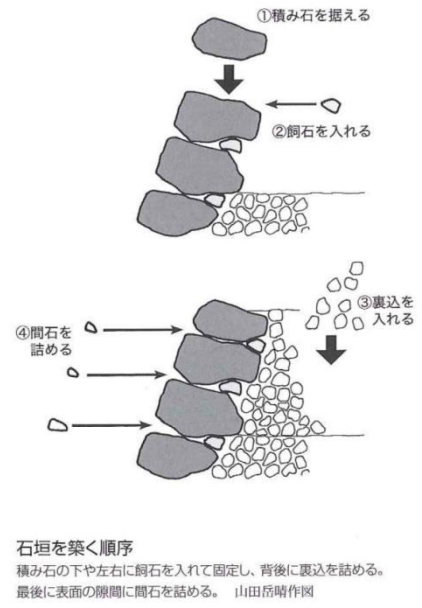
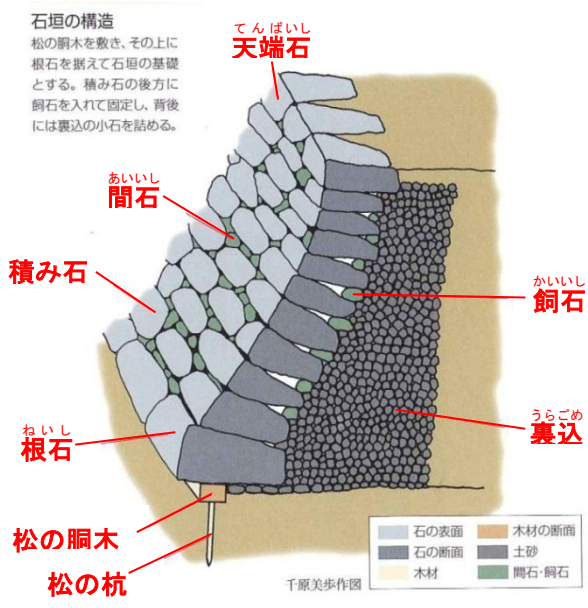
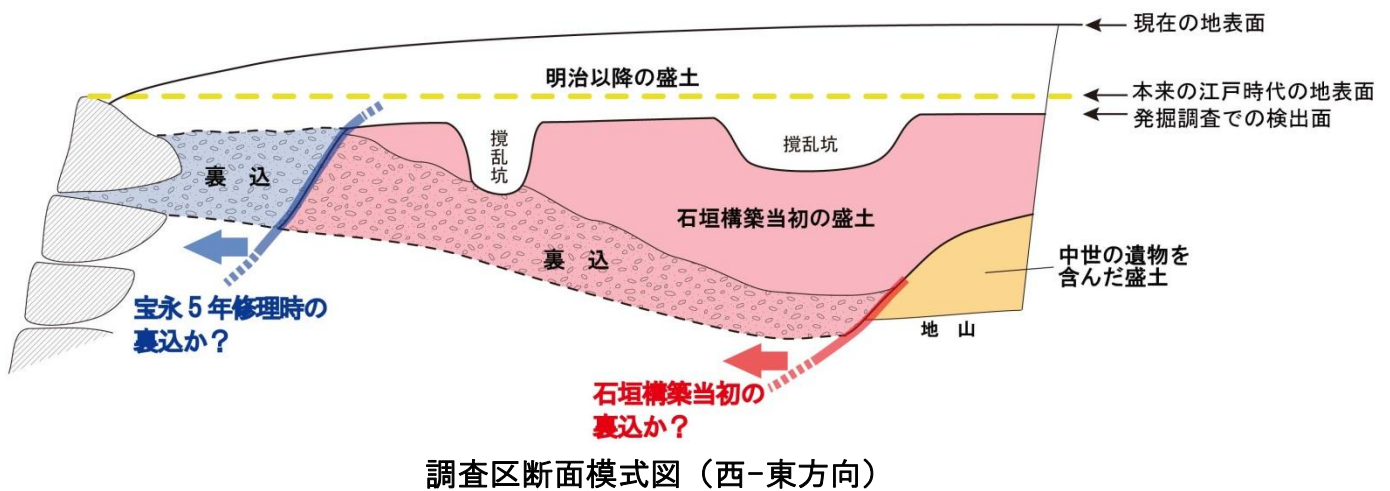
調査区遺構平面図

★石垣裏込と修理痕跡の発見

石垣の裏側には裏込が带状に幅約1mで良好に確認されましたが、部分的に深掘りした溝(トレンチ)では、下層から別の裏込も見つかりました。この裏込は最大幅約4mもあるかなり幅広のものです。

この幅広の裏込は石垣構築当初のものと考えられ、幅狭の裏込の方は石垣修理の際に幅広の裏込を切り込んで新たに入れられたものと思われます。このことから、石垣の修理が少なくとも1回は行われたことが考えられます。大洲藩の記録には宝永5年(1708)の修理記録が確認できるのみであり、この時の修理痕跡である可能性が考えられます。

なぜこのような幅広の裏込になったのか、今回の調査では明らかにはできませんでしたが、来年度予定されている石垣解体工事の際に解明していきたいと考えています。



石垣の構造と構築方法
(三浦正幸『城のつくり方図典』(2005)より転載。一部改変)

★石垣に影響を及ぼす根の検出

調査区内には直径約1mの切株が残されていますが、調査を進めていくとその根が石垣を押し出している状況が検出されました。また、円形石積遺構の直上に根が伸びている状況も検出され、今回は幸い遺構に影響はありませんでしたが、遺構内に根が侵入して破壊されていた可能性もあります。

この切株は、平成11年度に大洲城天守復元事業に伴って伐採されたケヤキのもので、伐採当時は樹高約22mの大木でした。石垣に向かって伸びた根が、石垣にあたって左右に湾曲して伸び、それが石垣を圧迫している様子が分かります。根は1cmあたり約10kgの圧力をかけるとされていますので、伐採され根の進行は止まっていたましたが、そのままであったならば石垣にさらなる影響を及ぼし、最悪の場合は石垣を崩落させた可能性も考えられます。

実際、宇和島城跡では石垣が崩落した事例があり、石垣の上面にあったクス(幹周約2m、樹高約15m)の根が崩落の要因の一つになったと考えられています。



ケヤキ根株の検出状況



円形石積遺構上に伸びるケヤキ根



石垣崩落前の状況



石垣崩落後の状況



石垣上面のクスの根株検出状況

宇和島城の石垣崩落状況
(宇和島市教育委員会提供)

History of Ozu Castle 大洲城の沿革

■別名

地藏ヶ嶽城 比志城 亀城

■歴代城主および年代

宇都宮氏 天正 7年 (~ 1579)
 大野直之 天正 7年 ~ 天正 13年 (1579 ~ 1585)
 小早川隆景 天正 13年 ~ 天正 15年 (1585 ~ 1587)
 戸田勝隆 天正 15年 ~ 文禄 3年 (1587 ~ 1593)
 藤堂高虎 文禄 3年 ~ 慶長 14年 (1593 ~ 1609)
 脇坂安治・安元 慶長 14年 ~ 元和 3年 (1609 ~ 1617)

加藤家 元和 3年 ~ 明治 2年 (1617 ~ 1869) ※貞泰から泰秋までの13代にわたる

■大洲城の指定データ

本丸 台所櫓 安政 6年 (1859) 再建 国重要文化財 (昭和 32年 6月 18日指定)
 高欄櫓 文久 元年 (1861) 再建 国重要文化財 (昭和 32年 6月 18日指定)
 芋綿櫓 天保 14年 (1843) 再建 国重要文化財 (昭和 32年 6月 18日指定)
 二の丸 下台所 県指定有形文化財 (昭和 43年 3月 8日指定)
 三の丸 南隅櫓 明和 3年 (1766) 再建 国重要文化財 (昭和 32年 6月 18日指定)
 大洲城跡 本丸・二の丸の一部 県指定史跡 (昭和 28年 2月 13日)

■本丸井戸曲輪の修復等関連データ

宝永 5年 (1708) 北西側の石垣折廻り 16間 (約 31m) の修復が行われる。
 明和 9年 (1772) 井戸曲輪石垣の修復が行われる。
 嘉永 元年 (1848) 井戸丸御門で火災が発生する。

■概要

大洲城は、肱川中流域に位置する大洲盆地で、肱川と久米川が合流する付近にある独立丘陵に築かれた平山城です。頂上に本丸、北から南の山麓部には細かく区切られた二の丸を配し、内堀を隔てて西から南にかけて三の丸を構える梯郭式の縄張りをとった城郭です。

中世の頃には宇都宮氏の居城であったが、天正 13年 (1585) の四国平定後、伊予国の領主となった小早川隆景の伊予国内の城郭整理によって存城として位置付けられると、その後城主となった戸田、藤堂、脇坂氏の代によって近世城郭へと徐々に整備されたとされています。江戸時代には天守を含めて 18 の櫓が存在したとされ、本丸から三の丸にいたる全範囲においては数多くの石垣の改修や櫓などの建て替えが行われていますが、基本的な城郭のスタイルに大きな変化はありませんでした。

明治 2年 (1869) 以降国の管轄となった大洲城は、明治 7年 (1874) 入札による払い下げが行われ、城の全範囲が個人の所有地となると、明治 21年には天守閣が解体されました。明治 39年には、本丸と二の丸の一部が大洲町 (現大洲市) の所有となり、城山公園として管理され始めますが、平成 16年の天守閣復元をきっかけに、城山公園整備の一環として城跡整備が進められるようになり現在に至っています。

大洲城郭域図

